

郷土室だより

第98号

平成9年12月25日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 09-039

中央区の“橋”

(その8)

◇女性の野次馬

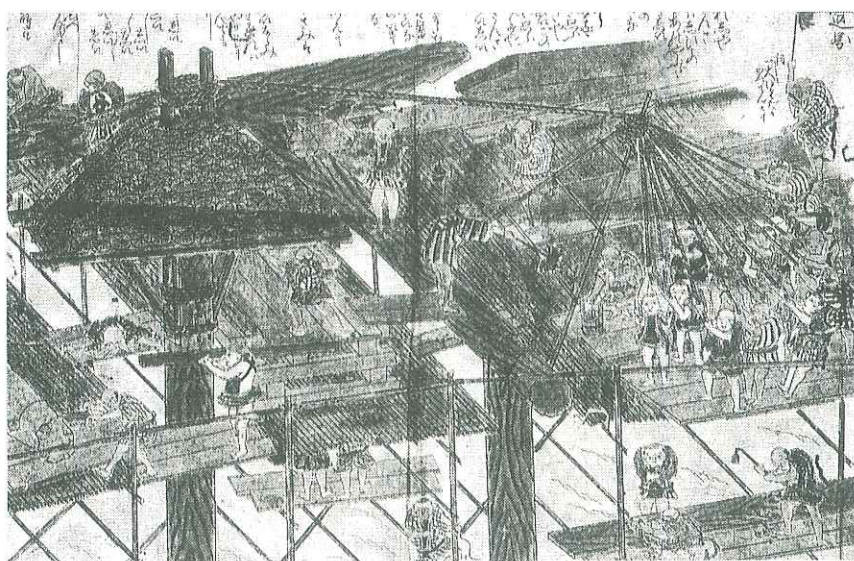
ここで荒川が「満水」になり、その結果千住大橋がこわれ、そのこわれた部分が下流の吾妻橋に流れ当って、吾妻橋が落ちるという事件の「ドキュメント」の一部を「明治東京百話シリーズ」で有名な篠田敏造著『幕末明治 女百話』で見ることになります。これは題名のとおり幕末から明治・大正・昭和と生きた女性たちの見聞を、昭和七年（一九三二）前後にまとめたものです。

そのうちの一つ、題して「千住大橋と吾妻橋の心中」という話を、必要な部分だけを引用して紹介します（省略しなければ、たいへん面白いものなのですが……）。

明治十八年の七月二日の夜なんです、千住の大橋が落ちてたというので、吾妻橋が危ないという騒ぎ（中略）。（以下「」内は引用者が入れました。）

千住から帰って来た人の話に、『千住は大騒ぎで、警視庁のお係官から、水防組や消防組で、大橋の上へは、太綱を綾にからんで、陸の方へシャチを置いて、繋ぎとめていた。アノ大きい長い橋が、上からの大水でしなっているんで、今にも墜ちそうだ』（中略）。

次の人の話では『今大橋が墜ちたから（それが流れてきて）吾妻橋にぶつかれば吾妻橋、お厩橋も墜ちて两国橋が危ない』というので、吾妻橋の墜ちるのを夜中の十二時頃に見物に行く（中略）。



『矢作橋杭 震災図』（都立大学附属図書館蔵）

この時両国橋も既橋も、通行人は停められて、消防組水防組警視庁、憲兵隊が固めて、『どうしても既橋へぶつけないよ』と、必死の防禦で、とうとう「流れてきた千住大橋の橋材を」番場〔墨田区側〕へ引寄せ、シャチで繋ぎ止めたんで、ヤット安心したといいました」(中略)。

〔千住〕大橋というのは、徳川二代將軍秀忠公の御時代に、奥州街道ですから、仙台様に申し付けて、架けさせたもので、仙台様は将来を考えて、楠の太木を橋杭に用い、ソレが化石になってしまい、壊れっこないといわれたものが、上から大筏が流れて来て、ドシーンと衝突したから耐りません。橋杭をオツピシッて、橋桁を三十間流出してしまっただんですね。(後略)

と、この明治の女性は千住大橋の橋杭の材質をはじめ、「橋がしななつて」という緊迫的な表現や、その壊れ方について、深い関心を持っていたことがわかります。

さらに流失しそうな橋に、太綱をアヤにかけて、シャチで陸につなぎ止めたと、前号で見た両国橋水防請負人三右衛門が揃えた「震ぎどめ」の資材と同じものの、具体的な使用状況までを語っているのです。

◇船の衝突

これも前号で見たとおりなのですが、なおくわしくいうと前項の「橋の心中」のように①上流からきて衝突する場合と、②台風などの強風、③同じく台風時の高潮などで、船が橋脚にぶつかった場合と、④船頭の操船が下手で橋杭にぶつかる場合、および無灯火操船で衝突した場合などがありました。いずれも多くの実例があるので、一度に多数の船が橋脚||橋杭に衝突した例を紹介することにします。

この記録は幕府の「永代橋取払新大橋御修復取調候書留」という文書に綴り込まれたものなのですが、例によって要点だけを現代文になおして紹介することにします。

延享二年(一七四五)十一月十二日の「夜中」に「大風雨ニテ」廻船十六艘が永代橋に「流掛り、富田屋力右衛門船虎福丸ヲ先キ仕、」その後から十五艘が「一等二押掛」て、永代橋の杭二本を折った……

という事件がありました。旧暦の十一月ですから、多分現在でいえば九月末から十月中旬くらいに、東京湾を直撃した台風によるものと考えられます。

面白いことに、この台風の記録は、あの「記録麿」ともいえる齋藤月岑が編集した、江戸時代の代表的な「百科年表」である『武江年表』には書き洩らされています(月岑は神田雉子町の名主で、公務と共にあの有名な『江戸名所図会』をはじめ、多くの著作をしたひとです)。

その『武江年表』のこの年の氣象災害は「○八月十九日大風雨、芝海辺龍巻あり、○九月十四日、大風家屋を損ず、浅草福井町銀杏八幡の銀杏折る」とはありますが、この船十六艘を吹き流した大風雨にはふれていません。

ですから『武江年表』を拠りどころにして作られた、現在の多くの江戸関係の年表にも、この台風災害は出てきません。

ただ『金地院雜記』という芝の増上寺の子院の金地院の記録に「十二日、風雨」とあります(この『雜記』は天候・氣象の記事が豊富なことで知られているものです)。

◇十六艘の船の内わけ

現在のように一週間以上も前からひとつの台風情報がテレビで放映され続けるわけではなく、ベテランの船乗や船頭でも肉眼で「日和見」をするほかに方法がなかった時代です。

「夜中」に「寝耳に水」といった具合に、海が荒れだした結果の重大事故だったわけで、初冬の台風「足」の速さが察せられます。それはさておき、この大風雨で流れ出した船の事故の最終的な責任者の廻船問屋の名と、船名、船頭名は、次のとおりでした。

○西河岸町廻船問屋

利倉屋 彦三郎

利倉屋方の問船たいぐね

たいく丸船頭

富田屋 金 蔵

灘吉丸船頭

日野屋 安右衛門

春日丸船頭

大津屋 平十郎

長栄丸船頭

彦四郎

○品川町裏河岸廻船問屋

銭屋 久左衛門

すいきん丸船頭

あらゐ屋 吉右衛門

若竹丸船頭

大津屋 長五郎

順風丸新造船頭

桑名屋 早之助

いたて新造船頭

桑名屋 幾 平

大現丸船頭

桑名屋 民四郎

○品川町裏河岸廻船問屋

井上 十左衛門

井上方問船

長久丸船頭

柏屋 藤 蔵

清水丸船頭

大津屋 十 蔵

春日丸船頭

悦之助

○南新堀二丁目廻船問屋

大坂屋 久兵衛

大坂屋方問船

春日新造船頭

撰津国屋 与 市

○南新堀二丁目廻船問屋

井上 十次郎

井上方問船

権力丸船頭

ざこ屋 彦四郎

○深川仙台屋敷廻船問屋

高木 伊左衛門

高木方問船

神功丸船頭

加賀屋 吉 助

以上のように六軒の廻船問屋と輸送契約を締結していた十六艘の船の八人の船頭と八人の舟頭が、この事故処理の当事者になったわけです。

深川の廻船問屋の高木を除き、五軒の廻船問屋の所在地を、現在の中央区の町名で並べると、つぎのとおりです。

西河岸||日本橋1-9

品川町裏河岸||室町1-2

南新堀二丁目||新川1-21、22

◇事故の後始末

十六艘一度の流出は珍しくても、こうした衝突事故は現在の交通事故と同じように、日常的にあったわけで、幕府の大原則は事故船とその積荷を没収して、橋の修繕費用にあてるというものでしたが、実際には廻船問屋と船頭(舟頭)の連帯で、永代橋の管理事務を命じられていた深川側の「掛り名主」との間の交渉で、修繕が行われたようです。

この事故の場合ですと、事実確認を済ませた後は、早々と廻船は上方に帰っています。

修繕の方は「掛り名主」が一般入札で工事業者と費用を決定して修繕をしています。落札された金額は廻船問屋が弁償したことはないまでもありません。

このような衝突事故の場合の橋の損傷は、たいてい橋杭一〜二本を折る程度でした。

その修繕方法は水練みづねの達者な者に損傷の箇所・程度を確認させたのち、橋杭全部をとり換えるか、「根継ぎ」をしたり「根巻き」をして修理するかでした。

全部とり換える場合が「震り直し」で、足場を組んで綱をかけてのように、前後左右に「ゆすつて」抜き上げたのです。

この折れた橋杭も大切に保存して、再利用、再利用するために、結構良い値段で拂い下げやら入札費用の「足し前たしまえ」にされています。

◇岡崎・矢作橋

表紙の写真は『矢作橋杭震込図』(都立大学附属図書館蔵)という彩色された絵図の一部です。なぜ突然この絵図を紹介したかというと、あらゆるジャンルで描かれた江戸の浮世絵の中に、このような図はないかと、十何年もさがし求めたのですが、上棟式関係のロープワークを描いた絵は何例か確認したのですが、ついに一九九五年十一月に発行された『太陽コレクション』『城下町古地図散歩2』(平凡社刊)で、この図を見るまで、私には見ることができなかつた風景の絵でした。それが都立大学附属図書館にあるということも一種の驚ろきでした。

都立大学附属図書館にあるということも一種の驚ろきでした。

この絵の説明を要約すると、岡崎城主水野家に伝わったものであること。「重しの載った橋杭を大勢の人で震込む風景を描き、上部には作業の音頭取りが唱う木遣り文句も記される」「綱を引く人足を鰻鰾人足と称し、岡崎の12、13歳の子供が多く雇われたという」鰻鰾のいわれは「口をあけて綱にとりつく故」で、「一カ所に二十〜三十人があてられた」

「矢作橋の普請は幕府によって行われる公儀普請であった。江戸時代を通じて矢作橋の架け替えは九回、修復は十四回行なわれている。幕府によるこの工事は地元岡崎にもさまざまな影響があった」

「完成すると、幕府代官の検査を受けたのち岡崎藩に引き渡される。橋の通常管理は地元岡崎藩の仕事であった」

「内は絵の説明の引用」。

◇震込み人足の唄

この絵の上にある「矢作橋杭震込図」の木遣りの「歌詞」は

飛ひた里や 飛ひた里や こ
こは頼志や

王かのしや 恵いこのさんさ
……(以下四六行におよぶ「労働歌」です)。

最後のカケ声の部分は
恵んさあ 恵んさあ あられ
ハさの
よわんやさのやあらのや引ー
恵ん恵ん恵んやあ 恵んやあ
恵んやのさア引ー

最初の部分を判読すると
引いたりや 引いたりや こ
こは楽しいや
若衆のや エイ コノ サン
サ……(以下省略)
という具合になります。

これを私の知っている齢九十に近い、小唄では現役の唄にこの歌詞を見せたところ、岡崎では今でも「よいこの さんせ お城下まで舟がつく しょうがいな」と唱われていると、節入りで教えてくれたこともつけ加えておきましよう。

長々と「ゆり込み」人足の唄、いいかえるといわば「あんこう節」のことを不十分ながら紹介してきましたが、この杭震込みとい

う方法は、これまで何回も江戸の橋の「ゆり込み」を紹介したように幕府の技術だったことがわかります。

そしてそれは幕府の直轄地の江戸・京都・大坂をはじめとする都市や天領と呼ばれた農村部でも知られていたものといえます。

さらにこの矢作橋のように岡崎藩内であっても、東海道の交通を確保するために、幕府がその持っている技術を公開して工事をやらせていますから、この絵でもわかるように太い橋杭を立てる方法としての「ゆり込み」は、全国的に普及していたといってもよいでしょう。

これはちょうど江戸の天下祭り「山王と明神の祭礼で、江戸各町の山車が将軍に見てもらうために城門をくぐる時に、てっぺんの人形がつかかえないようにするため、高さが三段に伸縮するいわゆる「江戸型山車」が工夫され、それが広範囲に普及していった状況が連想させる「技術の伝播」の有様の一駒でもあったわけです。

◇打ち込みから震り込みへ

オリンピック準備のために、東京都心部が突貫工事で湧き返っていた時期のことです。私は現在の東西線工事の沿線に住んでいたのですが、毎晩九時を過ぎると地下鉄工事のための長大なパイルの打ち込み作業が始まり、夜明けと共にそれを止めるという工事方法の被害を受けました。連夜の騒音と振動はとも寝てはいられないほどのものでした。

今ならばなぜそれをガマンしたのだ。バカだなあと若い人たちが軽蔑されるだけです。公害に対する「市民権」が全く認められなかった当時、被害者は泣き寝入りをするだけだったのです。

しかし騒音公害が問題になり始めてから、急速に地下鉄工事の杭打ち法は改善されていきました。はじめは大多数がモンケンと呼ばれた杭打機でした。高い「ギロチン」のような梯子状の櫓があつて、大きな分銅をワイヤーロープで吊り上げては、それを急に落として「処刑者」ならぬパイ(鋼矢板)の頭を叩いて打ち込むのです。(鈴木理生)